

『医師 酒井傳治郎』

三十三回忌に寄せて

酒井敏夫著

著者が誕生したとき、すでに父親は湘南の地で開業されていた。医院の充実とともに、著者は成長して行くのだが、母や姉から父の医師としての歩みを聞き、自らも医師の道へ進むにしたがって、その背中の大きさを感ずるようになったようだ。そのありさまが過不足無く、赤裸々に綴られている。それは、亡き父への限りない尊敬と愛情をもって描いた「父の肖像」に他ならないだろう。

クラブの会員諸子には代々医業を継いで来られた方が多い。私の友人にも緒方洪庵の末裔がいて、やはり医師になった。しかし、酒井傳治郎氏は商家へ養子として入り、家計の手助けとして小石川・砲兵工廠に勤め、愛顧を受けた技師の転勤

で大きく運命が変わっていく。小学校卒業の身で、医学校を経ていない父が各種の医師試験を経て医師免許を取得するまでの苦闘をたんと綴られている。

東京帝国大学医科大学衛生薬教室での研鑽や、実地医家たらしめて病院に奉職、ドイツ語の習

愛に溢れた父の「肖像画」
医の心、自然体で学び継ぐ



ても、定期的に往診する患者さんとの付き合いに、医師と患者のあるべき関係を巧まずして教わったようである。

本書の題名に添えてある「三十三回忌に寄せて」だが、近年ではなく十年余りも前に法事が執り行われている。その折の姉弟の思いが中心となって著書は成り立っている。その一つ姉の句

「父抱きて桜見せたき思ひし
て」と、父へ捧げた賛を次に紹介しよう。

さ 寒き夜も雨しげき日も
か 患者あれば遠きまで
い 医者への使命と
で 出かけて行く

ん 運命と云え誠実に
じ 仁術の道 全うし

ろ 六字の名号となえつつ
う 移り行く世の明けくれを案じるや
も

得に苦勞された話、毎夜医書
を手にし頁に赤いマークを
つけていたこと……医学雑誌を取り寄せ勉強を怠らない姿は、著者を自然体で医学の世界に誘導されたと述懐されている。とくに、日常の診療をやめるようになって

著者は書道展、美術展の常連。その理由も父譲りであった。(紹介・a)